

第16回

書道監修・執筆 川合広太郎

散らし書きに挑戦 ～仮名の表現～

今回学ぶこと

今回取り組むのは「散らし書き」だ。平安時代に書かれた「蓬萊切」^{ほうらいぎれ}をもとに、視覚的効果をねらって構成していこう。まずは3行の「蓬萊切」を4行にしたり、二つのかたまりに分けたりしながら、試行錯誤を繰り返してみよう。構成のヒントに、余白を意識することも大切だ。

学習前チェック！ 用語の意味を確認しておこう

ぎょうが ちが せんせき ふじわらのこうぜい くもがみ りょうし よはく
行書き／散らし書き／蓬萊切／三蹟／藤原行成／雲紙／料紙／余白

蓬萊切

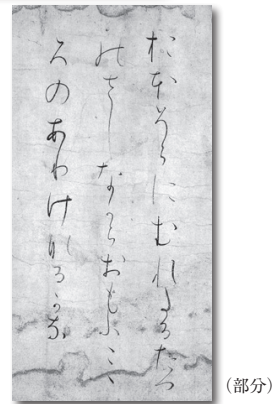
仮名の書は全般的に文字と文字がつながった^{れんめん}連綿が多く、またそれによって字形が多様に変化するため、読みにくいものが多い。その中で「蓬萊切」は、それぞれの字形が美しく整っていて、なおかつ連綿が少ないため、昔から仮名の書の入門教材としてよく用いられてきた。ほかの多くの仮名の古筆と比べると一文字一文字が大きめであることも特徴だ。

正確な筆者はわからないが、昔から、三蹟の一人藤原行成の書として伝えられてきた、平安時代を代表する古筆のひとつだ。

散らし書き

俳句や和歌などを書くときに、行頭の高さを変えたり、

今回のお手本



蓬萊切
(11世紀中頃)
伝藤原行成
(拡大版は53ページ参照)

今回の課題

- ①蓬萊切をアレンジして創作をしよう。
- ②平安時代の紙文化と料紙について学ぼう。

行間の広さに変化をつけたり、いくつかの集団に分けて書いたりする方法を「散らし書き」という。行の高さや傾き、集団どうしの間、墨継ぎの位置などを工夫して空間の美しさや立体感を出すことができる。試行錯誤しながら紙面を構成していくのもまた書の醍醐味だ。

平安の紙文化・料紙

平安時代の仮名の書の多くは「料紙」と呼ばれる装飾が施された紙に書かれている。水面に墨汁を落として作る墨流し、雲母という光沢のある鉱物を混ぜた絵の具で模様をつけた唐紙、蓬萊切に用いられた雲の形を漉き込んだ雲紙、金や銀の箔が散りばめられたものなど、さまざまな種類があり、料紙は平安の仮名の文化とともに大きく発達してきた。現在でも仮名の書ではこの料紙が用いられる。

達人からひと言！

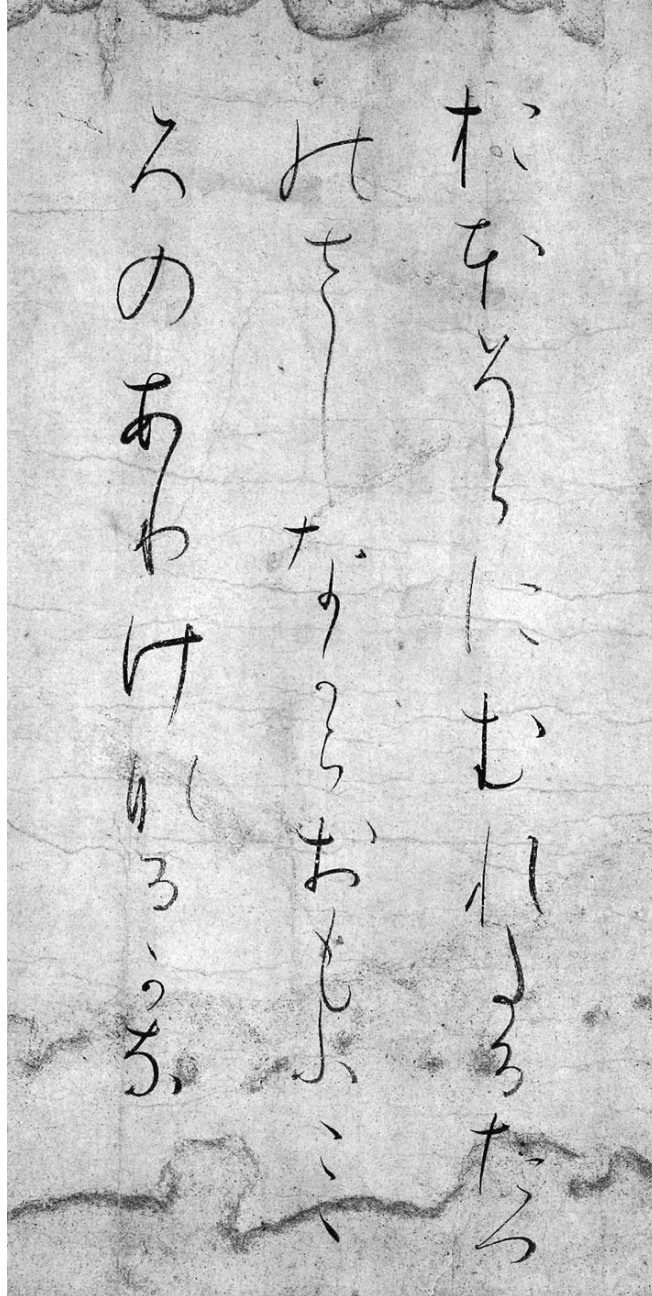
今回の目標は仮名の「散らし書き」だ。「行書き」の書もその構成を変えることでその作品の印象はガラッと変わる。蓬萊切をもとにしたアレンジに挑戦したら、ほかの古筆でも試してみよう。また散らし書きと言っても、ただ自由に文字を紙面に配置するだけでは美しい構成にはならない。そのヒントは平安の古筆の中にたくさん隠されているのでぜひ参考に見よう。書はただ古典を手本に書き写すだけではつまらない。古典につまっている美の要素をどうやって自分の作品に生かすかが大きなポイントだ。



達人

川合広太郎

蓬萊切



(部分)

於本曾
 おほぞらに むれたるたづ
 の能 さしなが^可ら おもふこ、
 ろの ありげなるかな^{可奈}

Handwriting practice lines consisting of ten horizontal dotted lines.